

イザヤ書7章 「主にしるしを求めない王」

1A 心揺らぐユダ 1-9

1B 攻め切れなかったアラムとイスラエル 1

1B それでも恐れるユダ 2-9

2A 主からのしるし 10-17

1B 主を試みないところにある高ぶり 10-12

2B インマヌエルとイザヤの子のしるし 13-17

3A アッシリアに頼る王 18-25

1B 一斉の襲撃 18-20

2B 凝乳を食べる地 21-25

本文

今晚は7章を学びたいと思います。私たちは、前回の学び、6章から、イザヤの預言活動において新しい段階に入ったことを見ました。ウジヤ王が死んだのです。それで、イザヤは改めて預言をする召しを受けたのですが、ウジヤではなく、主ご自身が王座に着いておられる幻を見ました。ウジヤの時代における、エルサレムとユダの状況とは比べ物にならない、不正と悪がはびこります。そして、イスラエルの民が、主のことばを聞かず、心を頑なにし、悟ることがないようになると、主が前もって、イザヤに語っておられました。

しかし、そこにも希望の光があります。6章の最後には、残されたごく少ない民に、聖なる裔、つまり神を恐れる残りの民がいることを教えていました。そうした者たちに与えられる、希望と平和があります。私たちは降誕節の礼拝を献げましたが、イスラエルの慰めを待ち望んでいたシメオンや、エルサレムの贖いを語った女預言者アンナのような人々です。7章から、ウジヤの孫、アハズの時代になります。ここで、ユダの国が、北のイスラエル王国と同じように、一気に神に背くようになります。しかし、その中でも希望の光があります。7章から9章の途中までが、その話になります。

ここでの希望は、男の子です。イザヤが救いのしるしとなり、彼から生まれる二人の子がそのしるしです。けれども、その二人の息子以外に、究極の救いを与える神の御子ご自身の預言があります。ダビデの裔としてその子が生まれますが、彼こそが神の御子であり、神ご自身であるという預言です。女の子孫が、蛇の子孫のかしらを打ち砕くという、神の初めの預言があり、そして、アブラハムの子孫が敵の門を打ち砕くという預言があり、ダビデの子が栄光の王としてエルサレムの門から入場するという預言があり、男の子に対する期待と希望があるのです。

そして背景が、イスラエルを取り巻く複雑な環境です。アッシリアという国が、ユーフラテス川の

地方から台頭します。メソポタミア地方です。創世記 2 章から、エデンから川の流れる地域の一つとしてアッシュルという名が出てきています(2:14)。かつて、ニムロデという、主に反抗する権力者が、バベルを始め、アッシュルにも進出しています(10:11)。古からの国であることが分かります。そして、紀元前八世紀に世界の征服と支配をたくらむ帝国として拡大します。

そんな中に、ユダの国が置かれています。こういった時こそ、自分たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神によりすがるべきですね。しかし、アハズはその正反対の道をまっしぐらに歩きました。祖父ウジヤや、父ヨタムの道を拒んで、イスラエルの神以外のものであれば、何でも取り入れていたのです。ここが、アハズにあった根本的な問題、霊の問題がここににあります。イザヤが、しるしになっていることは象徴的です。彼の名は、「救いは主のもの」であります。アハズは、救いは主にあることを頑なに拒み、ただ恐れだけで突き動かされていた人間です。

1A 心揺らぐユダ 1-9

1B 攻め切れなかったアラムとイスラエル 1

¹ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時代、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ベカが、戦いのためにエルサレムに上って来たが、これを攻めきれなかった時のことである。

ウジヤの子ヨタムはウジヤがツアラアト(らい病)にかかってから共同統治で治めていましたが、ウジヤの死後、16 年の期間、統治をしています。ヨタムは主の目にかなうことを行なっていましたが、ウジヤの生前の時から主から離れていた民は、ますますその滅びへと向かっていました。イザヤは、かつて彼らが主に向かず、指導者に頼っていたため、彼らを取り除かれて、ついに「3:12 わが民は、幼子が虐げ、また女たちがこれを治める。」にまでなることを預言していましたが、はたしてヨタムの子アハズは、幼子のような、女のような統治でありました。

彼がどのような王であったか、見てみましょう。歴代誌第二 28 章1節からです。

¹アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、主の目にかなうことを行わず、²イスラエルの王たちの道に歩み、そのうえ、バアルの神々のために鑄物の像を造った。³彼は、ベン・ヒノムの谷で犠牲を供え、主がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、忌み嫌うべき慣わしをまねて、自分の子どもたちに火の中を通らせた。⁴彼は高き所、丘の上、青々と茂るあらゆる木の下で、いけにえを献げ、犠牲を供えた。

主の前に出ていくことを彼は拒みました。回りは恐れるものでいっぱいです。そこで、自分の弱さを主の前に持っていき、その前でへりくだって、主から力と知恵をいただくべきですが、それを拒みました。自分に誇り、自尊心があるので、それをしっかりつかみながら、自分に役立つものに依

存していきました。それがイスラエルの王たちが拝んだ偶像であり、バアルであり、カナン人の忌まわしい慣わしだったのです。ベン・ヒノムの谷というのは、エルサレムの西から南に走っている谷であり、そこに、神殿のいけにえで出てきた老廃物を焼却したりしていました。そこで、かつてヨシヤアたちが追い出した住民、カナン人の忌まわしい慣わしを自分たちが行うようになりました。そして、高き所や、丘の上、青々と茂る木の下では、性的に忌まわしいことをしながら、異教の儀式を行いました。

パウロは、幼い信仰を持っていたコリント人たちに、「I コリ 16:13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。」と言いました。雄々しくありなさいとは、男らしくありなさいとも訳せます。今、起こっている状況をしっかり目を覚まして凝視し、それに合わせて持っている信仰に堅く立ちます。それが、雄々しさ、あるいは男らしさです。度重なる試練や困難に対して、主の前に出ていき、心を注ぎ、主から聞いて、力を得るとというのが、男らしいことです。他の何かに依存することなく、主に抛り頼んで人々を率いるのです。しかし、アハズのその正反対です。

ここに、「アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカ」が登場します。レツインは、アラム(シリア)の最後の王で、これからの預言で見るようにアッシリアの王ティグラト・ピレセルが、紀元前 732 年にダマスコを滅ぼします。そして、ペカは北イスラエルの最後から二番目の王です。北イスラエルは、ヤロブアム二世の時に最盛期を迎えますが、彼がいなくなると急速に弱体化しました。しかし、北からはアッシリアが攻めてきています。それでペカは、レツインと手を組んでアッシリアに対抗しようとしたのです。そこでユダもこの反アッシリア同盟に加えようとして、その王を自分たちの傀儡に代えようと企んでいたのです。

そこで攻め込みますが、ここに「これを攻めきれなかった」とあります。主が介入されました。その詳しい様子は、歴代誌第二 28 章の先ほど読んだ箇所の続きにあります。

⁵ 彼の神、主が彼をアラムの王の手に渡されたので、彼らは彼を討ち、彼のところから多くの者を捕虜にしてダマスコへ連れ去った。また、彼はイスラエルの王の手に渡されたので、イスラエルの王は彼を討って大損害を与えた。⁶ レマルヤの子ペカは、ユダで一日のうちに十二万人を殺した。みな勇士たちであった。彼らとその父祖の神、主を捨てたからである。⁷ エフライムの勇士ジクリは、王の子マアセヤ、王の家の長アズリカム、王の補佐官エルカナを殺した。⁸ イスラエルの人々は、自分の同胞の中から、女たち、男女の子どもたち二十万人を捕虜にし、また、彼らから多くの物を略奪して、分捕り物をサマリアに持って行った。

このようにして、一度、アラムの王とイスラエルの王がユダに攻め入ったのです。しかし、主が次のように介入されます。

⁹ そこには主の預言者で、その名をオデデという者がいた。この人はサマリアに入って来た軍隊の前に進み出て言った。「見よ。あなたがたの父祖の神、主がユダに対して憤られたため、主はあなたがたの手に彼らを渡された。ところが、あなたがたは天に届くほどの激しい怒りをもって彼らを殺した。¹⁰ 今、あなたがたはユダとエルサレムの人々を従わせて、自分たちの男女の奴隷にしようとしている。ただ、あなたがた自身も、あなたがたの神、主に対して罪過があるのではないか。¹¹ 今、私に聞きなさい。あなたがたの同胞の中から捕らえた捕虜を帰しなさい。主の燃える怒りがあなたがたに臨んでいるからだ。」¹² そのとき、エフライムの人々のかしらたちの中から、ヨハナンの子アザルヤ、メシレモテの子ベレクヤ、シャルムの子ヒゼキヤ、ハデライの子アマサが、戦いから帰って来た者たちに対して立ち上がり、¹³ 彼らに言った。「捕虜をここに連れて来てはならない。私たちを、主に対して罪過ある者とするようなことをあなたがたは考えて、私たちの罪と罪過を増し加えようとしている。私たちの罪過はすでに大きく、燃える怒りがイスラエルの上に臨んでいるからだ。」¹⁴ そこで、武装した者たちは、首長たちと全会衆の前で、捕虜と略奪した物を手放した。¹⁵ 指名された人々は立ち上がり、捕虜を引き受け、彼らの中で裸の者にはみな、分捕り物の中から衣服を取って着せた。彼らは捕虜に衣服を着せ、履き物を与え、食べさせ、飲ませ、油を塗り、また、足の弱い者はみなろばに乗せ、なつめ椰子の町エリコにいる兄弟たちのところへ連れて行った。こうして、彼らはサマリアに帰った。

このようにして、主がユダを守ってくださったのです。

1B それでも恐れるユダ 2-9

² ダビデの家に「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。

再びアラムと北イスラエルが攻めてこうとしています。共謀しています。エフライムとは、北イスラエルの代表的な部族で、北イスラエルのことです。主が、前回、あのように入介入して守ってくださったのにも関わらず、彼らは恐れに満ちてしまいました。

³ そのとき、主はイザヤに言われた。「あなたと、あなたの子シェアル・ヤシュブは、上の池の水道の端、布さらしの野への大路に出向いて行ってアハズに会い、⁴ 彼に言え。『気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたは、これら二つの煙る木切れの燃えさし、アラムのレツインとレマルヤの子の燃える怒りに、心を弱らせてはならない。』

「上の池の水道」というのは、エルサレムの町の城壁の外にあるギホンの泉からエルサレムに流れている水道のことです。これからアラムとイスラエルが自分たちを攻めてくると思って、もしかしたらこの水道の部分を偵察に来たのでしょうか。後にヒゼキヤ王が、アッシリアの攻撃に備えて、町の外にある水源をみな閉じて、地下にトンネルを掘り、シロアムの池に流れるようにしました(2

歴代 32:30)。

そしてここで、イザヤは自分の幼子を連れて行っています。「シェアル・ヤシュブ」という子です。意味は、「**残りの者は立ち返る**」というものです。10 章 21 節に、「**残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。**」とあります。イスラエルの民が、6 章 13 節にある、聖なる裔になることができるという約束です。この子が、主がしるしとして与える子の一つ目です。

二つの国のことをイザヤは、「**二つの煙る木切れの燃えさし**」と呼んでいます。彼らは、いずれ近いうちに滅ぼされる者たちで、事実、732 年に二人は死にました。恐れることはありません。

⁵ アラムは、エフライムすなわちレマルヤの子とともに、あなたに対して悪事を企てて、⁶「われわれはユダに上ってこれを脅かし、これに攻め入ってわがものとし、タベアルの子をその王にしよう」と言っているが、⁷神である主はこう言われる。それは起こらない。それはあり得ない。

「タベアル」というのは、おそらくアラムの地区の名前か人名でしょう。つまり傀儡にしようと企んでいます。しかし、主はそんなことは起こらないと保証しておられます。

⁸ アラムのかしらはダマスコ、そのダマスコのかしらがレツインだから。——エフライムは六十五年のうちに、打ちのめされて、一つの民ではなくなる——⁹エフライムのかしらはサマリア、そのサマリアのかしらがレマルヤの子だから。あなたがたは、信じなければ 堅く立つことはできない。』

「六十五年のうちに」とあります。イザヤがいま預言をしているのは紀元前 734 年ですから、その 65 年後は 669 年です。この時すでに、北イスラエルはアッシリアによって 722 年に滅ぼされていましたが、669 年にはアッシリアの王オスナパルが、さらに多くの外国人をサマリアの地域に移住させていたことが、エズラ記 4 章 10 節に記録されています。つまり、ここにあるように「**もう民ではなく**」なったのです。イスラエル人ではなく、サマリア人になってしまいました。預言の言葉はその通りになりました。

しかし、「**信じなければ 堅く立つことはできない**」と警告しています。主がそうしてくださるのに、主に立ち返って、信じなければ、ユダの国は長く立つことはできないと警告しておられるのです。

2A 主からのしるし 10-17

1B 主を試みないところにある高ぶり 10-12

¹⁰ 主はさらにアハズに告げられた。¹¹「あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」¹²アハズは言った。「私は求めません。主を試みません。」

これは、私たちが聖書を読むときに文字面だけを追ってはいけない、一つの典型的な例です。「主を試みません。」は、いかにも靈的に聞こえます。主を試みてはならないとも書いてある、と主が、聖書を引用して悪魔に抵抗されました。けれどもここで言っているのは、全く別のことです。アハブは、イスラエルの神とは全く無縁の生活をしていました。彼は、父ヨタム、また祖父ウジヤが仕えていた神のことは知っていました。けれども彼の反抗心によって、そのような神とは関わりを持たないと思っていました。

だからここで、主がイザヤを通して、「あなたの神、主に、しるしを求めよ。」とアハブに言われているのは、主の憐れみによるものであって、全く関心のない、関わりを持ちたいと願わないアハブに対する語りかけです。かたくなに主を拒む人にも、主が憐れみをかけておられることを示すために、言葉を信じられなくても、しるしをもってなら信じることができるなら、しるしを求めなさい、と問いかけておられます。主がユダヤ人指導者に、「ヨハネ 10:38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に在ることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」と言われたとおりです。だからアハブが、「主を求めません。」と言っているのは、「私は神とかというものには、関わりは持ちませんから。」と言っているのと同じことです。

私は、主なる神を求めません、と言っている人々は、大勢、今日もいます。ある人は、神というものは、一切、信じない。なぜなら、宗教というのは危険であると言います。ある人は、アハズがそうであったように、親が信仰深い人であるということもあります。けれども、教会の中で育って、自分はそういう生き方はしないとして、世の中でこそ真実な生き方なのだとしめます。では、何を信じているのか？ということになるのです。他にいろいろなものを信じています。神やイエス以外のものであれば、何でも信じています。あるいは、自分自身を、自分の成果や人柄や、何か自分のうちにあるものを頑なに守ろうとしています。そして、自分がいかにおかしい方向に突っ走ってしまっているのかが、分からなくなってしまうのです。

2B インマヌエルとイザヤの子のしるし 13-17

¹³ イザヤは言った。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。¹⁴ それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

ここで、主語が変わっていることに注目する必要があります。アハズ個人に対して語っているのではなく、アハズが代表する「ダビデの家」に語っています。「あなたは」ではなく、「あなたがたは」となっています。

アハズがこのようにして主を求めない、その頑なさが、ダビデの家の全般、ユダヤ人の指導者

に存在しています。そのとき、主自らがしるしを与えられます。イザヤの息子ではない、男の子です。処女から生まれる男の子が、そのしるしだと言います。インマヌエルという名です。これが、マタイによる福音書 1 章で、処女マリアからイエスが生まれたことで、この預言が成就したことを話しています。「マタ 1:22-23 このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。」

処女から生まれるというところに、この方、キリストがアダムの罪を受け継がない聖なる方であることを示しています。そして聖霊による降誕ということで、いと高き方の子、神の御子であることを示しています。人でありながら、神ご自身であることを示す預言です。「ことばは人となって、私たちの間に宿られた。(ヨハネ 1:14)」が実現するのです。この小さき子に神の本質の全てが宿っています。ここに希望と慰めがあります。私たちの間で、主は必ず生きた力を示してください。どんなに暗き世であっても、暗闇が打ち勝つことのできない光の力が輝いています。

¹⁵ この子は、悪を退けて善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。¹⁶ それは、その子が悪を退けて善を選ぶことを知る前に、あなたが恐怖を抱いている二人の王の土地が見捨てられるからだ。¹⁷ 主は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ臨んだこともない日々をもたらす。それはアッシリアの王だ。」

15 節を見てください、「この子は」とあります。これは、インマヌエと呼ばれる子のことではなく、今、イザヤが抱いているであろう、シェアル・ヤシュブのことです。そして語りかけは、ダビデの家ではなく、「あなたが恐怖を抱いている」と、アハズ個人に戻っています。悪を退け、善を選ぶことを知るころまで、と言っていますが、物心がつくときまで、ということです。凝乳と蜂蜜を食べるのは、18 節以降に出てくるアッシリアのユダの侵略によって、作物が育たず、残された家畜の出す乳しか食べるものがない状態になることを、予告するものです。

主は、主ご自身で二人の王を滅ぼされることを御心としておられました。事実、この二年後、732 年にアッシリアがアラムを攻め、捕え移しました。しかし、アハズは致命的な過ちを犯します。主がして下さることを全く信用せず、自分を守ってくれる者として、なんとアッシリア自身を選んだのです。主なる神に信頼するのではなく、強い者に依存しました。列王記第二 16 章 7-9 節以降に、アハズがアッシリアに贈り物をして、この二国を倒してくれるように頼みました。

⁷ アハズは使者たちをアッシリアの王ティグラト・ピレセルに遣わして言った。「私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から救ってください。」⁸ アハズが【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出して、それを贈り物としてアッシリアの王に送ったので、⁹ アッシリアの王は彼の願いを聞き入れた。アッシリアの王は

ダマスコに攻め上り、これを取り、その住民をキルへ捕らえ移した。彼はレツインを殺した。

はたして、アッシリアは彼の願いを聞いれ、それでダマスコを攻め取ったのです。けれども、問題はそれで終わりませんでした。アッシリアはユダにも進出してきたのです。「2歴代 28:20-21 アッシリアの王ティグラト・ピレセルは彼のところに来たが、彼の力になるどころか、むしろ彼を苦しめた。アハズは、【主】の宮、および王と高官たちの家から物を取って、アッシリアの王に贈ったが、何の助けにもならなかった。」とあります。そして、アッシリアが、北イスラエルの民を捕え移すだけでは満足せず、ユダにまで浸食してくるのです。

3A アッシリアに頼る王 18-25

1B 一斉の襲撃 18-20

¹⁸ その日になると、主はエジプトの幾筋もの川の果てにいるあの蠅、アッシリアの地にいるあの蜂に合図される。¹⁹ すると彼らはみなやって来て、険しい谷、岩の割れ目、あらゆる茨の茂み、あらゆる水飲み場に巣くう。

ユダの南には、大国エジプトがいます。そこには、ナイル川に群がる蠅がいます。そして、アッシリアは、蜂の群れに喩えています。そして、ユダの町々を隅々まで入り込んでいくことになるかと語られています。自分たちが守られるところはなく、どこに行ってもエジプトか、あるいはアッシリアかに攻め込まれるのです。

²⁰ その日、主は大河の向こうで雇ったかみそり、アッシリアの王を使って 頭と足の毛を剃り、ひげまでも剃り落とす。

当時の男にとってひげは、尊厳そのものでしたから、完全に侮辱することを意味しています。

2B 凝乳を食べる地 21-25

²¹ その日になると、一人の人が雌の子牛一頭と羊二匹を生かしておく。²² これらが乳を多く出すので、彼は凝乳を食べるようになる。この地に残されたすべての者が凝乳と蜂蜜を食べるようになる。

²³ その日になると、銀千枚に値する、ぶどう千株のある地所もみな、茨とおどろのものとなる。²⁴ 全土が茨とおどろになるので、人は弓矢を持って、そこに行く。²⁵ 鋤で耕されたすべての山にも、あなたは茨とおどろを恐れて、行かない。そこは牛が放たれて、羊の踏み歩く場所となる。

土地が荒廃し、作物が育たず、家畜も非常に少なくなる様子を描いています。もう育てる子牛がないので、飲ませる乳が余り、それで多く乳が出ます。他の農産物はなくなるので、人々は野生の食物である蜂蜜を食べて、また乳を固めた凝乳を食べます。それで、イザヤの男の子、シェアル・ヤシュブは、物心がつくまで、凝乳と蜜を食べるようになるのです。

ここまでして、主の憐れみと助けがあるのに、それを見事なまでに拒むのが、アハズでした。その後の話も悲しいのですが、彼はなんと、アッシリアに貢物を持っていくために、ダマスコまで来た時に、そこでアラムの神に献げる祭壇を見つけました。Ⅱ歴代 28 章 22-24 節です。

²² アッシリアの王が彼を苦しめたとき、このアハズ王は、さらに【主】の信頼を裏切った。²³ 彼は、自分を打ったダマスコの神々にいけにえを献げて言った。「アラムの王たちの神々は彼らを助けている。この神々に、私もいけにえを献げよう。そうすれば私を助けてくれるだろう。」これらの神々は、彼と全イスラエルをつまずかせるものとなった。²⁴ アハズは、神の宮の用具を集めた。彼は神の宮の用具を取り外し、【主】の宮の戸を閉じ、エルサレムの街角のいたるところに祭壇を造った。

そして、このアラムの神への祭壇を、エルサレムの神殿の祭壇のところに、その祭壇を移動させて、アラムの神の祭壇を置きます。そして祭司たちに、いけにえを献げさせるのです（Ⅱ列王 16:10-16）。

本当に悲しいことです。私たちには、愛する、憐れみ深い神がおられます。どんなに不安な時にも、共にいてくださる神、つまり肉体を取られたキリストがおられます。この方に叫び求めればよいことなのですが、自分自身を守るために、その高ぶりのために恐れ退くのです。

最後に、ヘブル 10 章 36-39 節を読みます。「あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」私たちが、アハズのように、いろんな不安なこと、恐ろしいことが起こるのを目にします。その時に、正しいところに立ち直ることができるか？主ご自身に叫び求めるか？それとも、他の頼りにならないものにすがって、ますます道を外すのか？のどちらかです。恐れて退いて、滅ぶのではなく、信じて救われるのです。